

花 き

実 況

1 キク

奥越の秋植え 6～7 月咲きギクは、2 月下旬現在が 10～20cm である。3 月上旬には多くの圃場で消雪する見込みである。そのため、早期出芽による凍害が警戒されている。消雪後すぐに不織布をかけて新芽の保護が行われた。春植え夏秋ギク用親株は、白さび病、黒さび病が見られたが、現在は発生が落ち着いている。冬至芽摘心作業は 1 月下旬に行われた。また、この時期多くの生産団体の総会が行われ、J A テラル越前キク部会が 3 月 1 日、越の花生産組合が 3 月 4 日であった。

あわら市では 2 月 15 日前後に夏～夏秋ギクの採穂が行われ、アザミウマ類、白さび病の発生がみられる。

福井では、夏秋ギク親株の冬至芽摘心作業を 1 月末～2 月上旬に実施された。春植え夏秋ギク用親株は、ハウス内で順調に生育している。一部の圃場で 1 月中旬から白さび病、アブラムシが発生しており定期的に病害防除を実施している。

南越、丹生でも、ハウス内で春植え夏秋ギク用親株を育苗中である。アブラムシが少発生しており、1 月中旬から定期的に病害防除を実施している。

二州、若狭地区の春植え 8 月咲きギクは親株管理中である。若狭地区は 2 月中旬の降雪でハウス管理に労力を要した。



写真1 第11回 J A テラルキク部会で挨拶される山岸勝山市長

2 スイセン

スイセンの出荷ピークは 12 月上旬となり、年末の需要期には昨年よりやや多く出荷された。1 月からは水仙まつりが各地で開催された。2 月上旬まで圃場に残っていたスイセンが出荷され、最終的に切り花平均単価は過去最高となった。

3 ユリ

春江の福井ユリは、1 月中旬から一作球根の掘り上げが行われており、順次定植されている。9 月に定植された L A ユリは一部で出芽している。

大野市では、1 月 19 日に播種されたシンテッポウユリが発芽始めである。保温用不織布は 3 月上旬に外した。

4 トルコギキョウ

越前市は、2月18日調査で2月上旬播種、3月下旬定植の作型が、育苗中である。2度切り栽培のトルコギキョウは草丈6cmで分枝数も3~4本ぐらいとなっている。

5 ストック

あわら市丘陵地のストックはほぼ出荷が終了し、3月出しが一部残っている。

二州のスプレーストックの一部にコナガがみられる。

若狭では12月上旬定植のカルテットシリーズが草丈30cmとなっているが、2月の寒さで生育は遅い。

対 策

1 秋植え夏ギクの春先管理

- (1) 古い茎葉は病害虫の一次発生源となるので、消雪後の出芽前後に地際部から除去する。特に、黒さび病の罹病が認められる品種は、除去後の古枝を肥料袋等で回収し、圃場外で速やかに処分する。
- (2) 防霜対策として、出芽してきたシュートを保護するために不織布でべた掛けする。べた掛けは開花も早まる可能性があるため、よく畝を観察し、1、2割のシュートがのぞいた時を見計らって行う。
- (3) 暮れに施した硝酸態の肥料は、ほとんど流亡しているため、基準量をしっかりと施用する。
- (4) 春肥施用後、畝溝の溝さらえを兼ねて2~3cmの土寄せを行う。

2 春植え夏秋ギクの採穂と挿し芽

- (1) 採穂の1~2日前に親株の病害虫防除を徹底する。芽の伸長初期には、保護殺菌剤の散布により、黒斑病や褐斑病、白さび病防除を徹底する。
- (2) 採穂時間は、しおれやすいため早朝に取るのがよい。
- (3) 摘心した親株から採穂する。挿し穂は手で摘み取り、展開葉3~4枚をつけ、長さ5~7cmに調整する。
- (4) 挿し芽間隔は葉と葉がわずかに触れ合う程度とし、深さは1.5~2cmとする。
- (5) 軽い挿し芽用土は作業性がよいため、パーライト5+クンタン5、パーライト5+ピートモス5、山砂7+ピートモス3等を用いる。一部の地域では、モミガラ単用で利用されている。
- (6) 挿し穂は冷蔵すると挿し芽後の生育がそろふ。冷蔵する場合は、発泡スチロールの箱に、挿し穂の切り口を下にして1列に並べて詰め込み、5℃の冷蔵庫に7~10日、2℃で2週間まで冷蔵できる。

3 春植え夏秋ギクの定植準備

- (1) 春先の圃場排水を行い、旧盆ギクは4月15日までに定植できるよう作業を進める。
- (2) 肥料は有機質肥料を主体に窒素成分で中輪ギク 3kg/a 標準とし、この内1~2割をそさい5号等の速効性化学肥料とする。
- (3) 定植圃場の耕耘は、土壌水分が適切な状態の時にトラクタの刃の回転をあげて行う。

4 トルコギキョウの定植準備と定植

- (1) 圃場は土が柔らかく、排水性が良いことに加えて、20cm以上の高畦とする。
- (2) 基肥はa当りF₁品種で窒素成分を1~1.3kg、リン酸は1.5kg、カリは2kg程度施す。
- (3) 苗が根づまり、老化しないように、本葉1~2対頃を目安に早植えする。15cm×15cmの6条植えとする。定植時に直根を切ると生育が悪くなるので注意する。
- (4) 土壌酸度(pH)は非常に重要であるので、必ず測定して6.5程度に矯正する。
- (5) 定植3~4日前に、植付け場所に十分灌水する。また、育苗箱を定植場所に持ち込み順化を行う。育苗箱に弁当肥(液肥500倍)を施しておく。
- (6) 定植後は液肥1000倍を灌水がわりに施す。その後1か月間は週1回液肥を施す。
- (7) 花のボリュームを出すため、花芽分化が始まる本葉8対(草丈が15~20cm)頃までは適宜、水分や肥料を十分に与える。
- (8) 二度切り栽培は草丈が10~20cmに達した時点で、生育が良い枝を2本程度残してその他の枝を取り除く。

5 スイセンの施肥管理

養成中のスイセン球根を肥大させるため、3月上旬までにそさい5号を10a当たり4kg施用する(窒素成分量6kg/10a)。

6 ヒマワリの播種と育苗管理

- (1) 天幅90cmの50m畝で種子量は5dl(約4000粒)を必要とする。
- (2) 200穴のセルトレイの吸水はトレイの底から水を吸わせる。種子は播種前日に水につけて吸水しておく。種子は一粒ずつ横向きに並べ、覆土をして新聞紙で覆い、十分灌水する。
- (3) 発芽温度は、20℃以上(発芽適温26℃)を確保する。低温で発芽揃いが悪くなると、その後の生育が不揃いになる。
- (4) 3~4日で発芽が始まるので、新聞紙を取る。発芽時に子葉についている種皮は手で取り除く。
- (5) セルトレイ苗は、最初の本葉が展開した頃(播種10日後)に遅れないよう定植する。
- (6) 定植は角材の先をプラグ苗に合わせて削り、土に穴をあけ苗を植える。軽く隠れるぐらいに覆土し灌水する。

- (7) 生育初期に 10℃以下の低温に遭うと生長が止まるので、低温の時はビニルでトンネルする。